

## 倫理問題の解決と吾人が信念：論説

著者	牧羊
雑誌名	龍南會雜誌
巻	9 0
ページ	1 5 - 2 1
発行年	1902-02-15
URL	<a href="http://hdl.handle.net/2298/5297">http://hdl.handle.net/2298/5297</a>

を爲すに及び、彼の野心は愈増進して文王を以て自ら期圖したるしが如きは寧ろ其不倫を笑はざるを得ずと雖ども彼は尙ほ漢室を翼戴するの意ありしことは述志令及短歌行を見れば章々として明白なり

要するに彼が周公を以て自ら任じ、文王を以て自ら期し、或は齊桓晉文が周室を轉覆せざりしを稱し、或は樂毅蒙恬が故主を圖らざりしを賛したるが如きは皆彼自身に漢室を忘れざるを見はしたるものなり、然れども是れ果して彼の中誠より發したるものなるか、或は一時の權略に出て、所謂英雄欺人的手段に非ざるか、彼が孔融に誅し、荀彧を自殺せしめたる如きは、彼の眞性決して寛厚慈仁に非ざるを知るべし、又その包容の德兼懷の量なきを証するに於て餘りあるなり、然るに荀修、郭嘉、荀悅、仲長統等皆絶世の才略と學識とを具へながら、しかも皆彼に心服して彼の爪牙と爲りしものは、全く彼の武略一世に超越して、能く人心を收攬するに足るものあるも亦一方に於ては彼の文才一世を凌駕して能く一代を風靡するものあればなり

### 倫理問題の解決と吾人が信念

牧 羊

倫理問題の解決は、我國目下の大問題なり。敢て吾人の信念を述べて、之を論ずるが如きは、自ら揣らざるの甚しき者なりと雖も、學生間の風潮は、吾人をして、止むを得ざらしむる者あり。何ぞ顧みて、逡巡するの違あらんや。若し、夫れ此の論文にして、幾分にてても、讀者に倫理問題の解決を促すに足る者あらば、吾人の希望は、十分に達せられたるなり。二十世紀の劈頭に於ける我國基

基督教徒の大舉傳道が、空前の大成功を奏したるの一事は、如何に世人が、宗教に接近しつゝ、あるかを示し得て十分なり。思ふに、宗教的信念を獲得せんとするの願望は、實に我國目下の大勢なり。然りと雖も、猶世の青年學生にして、冷然として基督教徒の熱烈なる運動にも、又先輩學者の宗教論にも、耳を傾くるなく、宗教を以て空想となし、信仰を以て、迷妄となし、何等の高尙なる理想を有するなく、何等の純潔なる情感を養ふなき者甚だ多し。吾人偶彼等に就いて、宗教問題を論ずるや、彼等即ち曰く、人間一切の行爲を規定する者は、倫理なり、倫理に守らば、人たるに於て、何の不可やあると。嗚呼倫理は、果して人をして人たらしむるの力を有するや否、東西古今に通じて、存する宗教的現象は、果して迷妄なりや否。

抑倫理とは何ぞや。唯人類行爲の規定のみ、唯善のなす可く、惡のなす可らざるを命ずるのみ。換言すれば、規則なり、命令なり、強迫なり。死せる規則と、壓制的の強迫が、如何ぞ生きたる人類を導き得んや。學校の規則が、如何に繁褥を極むるも、校風は擧らざるなり。校長の禁酒命令が、如何に嚴酷を加ふるも、其實は擧らざるなり。眞に禁酒禁煙を實行し、活きたる龍南の風氣を擧げんと欲せば、須く教師の圓滿なる品性、高潔なる心事、清廉なる情念、又眞に子弟を薰育せんとするの熱誠に待たざるべからず。

支那の大聖孔子嘗て嘆ずらく、

德之不修。學之不講。聞義不能徙。不善不能改。此吾憂也。

基督の使徒パウロは實に痛切に、這般の消息を傳ふらく、

我願ふ所の善は之を行はず、却りて願はざる所の惡は之を行へり。若し我れ願はざる所を行ふ時

は、之を行ふ行ふ者は我にあらず、我に居る所の罪なり。是故に我善を行はんと思ふ時に、惡の我に居る。此一の法あるを覺ゆ。蓋し我れ内なる人に就いては、神の律法を樂めども、我が肢体に外の法ありて、我心の法と戰ひ、我を擄にし、我が肢体の内に居る罪の法に従はするを悟れり。噫我れなやめる人なる哉。此の死の体より我を救はん者は誰ぞや。

豈、嘗に孔子パウロに於てのみならんや。醉世夢死の徒は、いざ知らず、苟くも、少しく、修養に志あるの士は、必ずや、早晚斯種の嘆聲を發せざるはなし。余輩は明かに、善のなす可く、惡の爲す可らざるを知る。確かに。嚴乎として侵す可らざる良心の命令を聞く。百も千も承知の上の事なれども、然も猶我等は之を實行する能はず。蓋倫理は前に述べたるが如く、生命なき規定に過ぎざればなり。強迫的の命令に過ぎざればなり。吾人固より倫理の無用を主張するものにあらず。倫理は確かに非倫理に優ること數等あり。然りと雖も、倫理の範圍は、到底義務的たるを免れず、苦行的たるを免れず、消極的たるを免れず。此れ豈人類至高の極致ならんや。宗教の起点實に此に存するにあらずや。

近時ニイッチェの末流を汲む者、切りに道德と智識とを斥けて、本能の至上を論じ、人生の至樂は、意に性欲の満足に存するを説く。彼等が道德と智識とを以て餘りに煩はしく、又餘りに迂遠なるに過ぐとなす者、誠に故あり。然りと雖も、性欲の満足を以て、直ちに絶對の價值ありとなすに至りては、謬見の甚しき者なり。彼等は全然宗教を解せざりしなり。宗教の妙趣に何等接觸せざりしものなり、請ふ吾人をして少しく吾人の宗教的信念を陳述せしめよ。

吾人は豫め一言讀者の注意を要する者あり。他なし、宗教は科學に非ざる事なり、吾人の宗教的意

織を批評するに、唯冷酷なる知識のみを以てする勿らん事なり。吾人と雖も、固より知識が、人生一日も欠ぐ可らざる者たるを知る、十九世紀の文明が、主として、其源を知識の進歩に有するを知る、又宗教の科學的研究が、如何に中世紀の迷信を打破せしかを知る。然れども忘る可らざる事は、人類は唯知識のみの動物に非るゝなり、吾人は常に冷かなる腦髓を有するのみならず、温かなる情念を有する者なり、知以外更に吾人を導く所の天真自然の情を有するなり。而して宗教は主として、此の高尙神聖なる情念の上に立つ者なるが故に、高潔なる情操を有せざる者は、到底共に宗教を談する資格を有せず。

さて、吾人の信仰を略言すれば、宇宙は決して物質偶然の集合にあらず、人生は決して無意義にあらず、天地は慥かに精神を有す、即ち神なり、神は人格的なり、愛なり。人類は其赤子にして、神は其慈母なり。愛によりて、神人相抱合眞契して一体となるに往り。

更に之を詳言せんに、吾人の所謂神は決して宇宙を離れ、人類を離れて存する超越的奇跡的の神にあらず。従て吾人は決して宇宙を以て神の細工物となし、人類を以て神の作りし土人形に過ぎずとなす者にあらず。吾人の神觀は、聖書に明なり。曰く、

神は萬人の上に在り、萬人に貫き、萬人の中に在り。

然り、吾人は人類に於て神を認むるなり。人類を離れて神なく、然も人類其物は神にあらず。否當に人類のみならず、宇宙も亦此れ神の顯現なり。宇宙を離れて神なく、然も宇宙其物は神にあらず。換言すれば、萬有は一大有機体なり、神は萬有の裡に遍在せる無限の生命なり。従て神は、必ずや人類の内に寓在し、人類は生れながらにして、神性を有す、人類は神に在りて生存し、神は人類

を通じて、進化發展す、萬有を通貫して、進化發展す。パウロが

神は我を離るること遠からず。夫れ我等は神によりて生き、又動き、又存する事を得るなり。

と云ひし者實に此なり。更に他の語を以て之を言はゞ、神の存在は、全く客觀的にもあらず、又全く主觀的にもあらず、神は實に二者を通じて存するなり。吾人は此神と交り、全然同情同感となり「我と神とは一なり」との意識に達するを以て、理想となす者なり。吾人茲に於てか、ロツチエが人間の人格を以て、神の人格の反影なりとなし、基督が「此最小さき者の一人を愛するは神を愛するなり」と云へるの誠に道理あるを信するなり、又創世記の「神其の像の如くに人を作れり」との記事が如何に深遠なる意義を其内に含蓄包容せるかを知る也。然り、神的生命を有すればこそ、人類は萬物の靈ども、神の子とも言ふ可けれ。

コントは人類を以て、直ちに神となして尊信崇拜せり。此れ固より極端なりと雖も、人類の價值が如何に大なるかを教へたるの点に於ては、其功や決して没す可らず。基督が神の化インカーネーション身なりとは、

陳腐なる神學說なりと雖も、或意味に於ては、眞理なりと言ふ可し。何となれば、古往今來、基督の人格程能く神を顯はしたる者なければなり。然りと雖も、當に基督のみならず、吾人と雖も、此意味に於ては或程度までは、神の化身なり。即ち人類は或一部の人によりて主張せらるゝが如く、アダム・エバの原罪によりて根本的に墮落せる者にあらず。却て其本質に於て神と一なり、神實に吾人に在り、吾人實に神に在るなり。嗚呼人類の宇宙に於ける地位豈偉ならずとせんや。

米國の大統領アブラハム・リンコン幼時ワシントンの傳を讀み、感奮措く能はず、案を拍ちて大喝すらく、「我をワシントンたらん」と、而して彼は實に第二のワシントンとなれり。思ふに、リンコン

ン始めワシントン<sup>の</sup>傳を讀むや、唯客觀的に彼の人物偉業を見しなるべし、然も自ら顧みるに及んでや、ワシントン<sup>の</sup>人格確かに自己の人格なるを悟り、感奮の情抑へんと欲して抑ふる能はず、勇往邁進以て其理想を實現せしなり。

聖パウロは始め、基督敎徒の迫害を以て任じ、聖徒ステパノの殺さるゝを見て、快哉を叫びし程なりき。此れ未だ彼が十分に基督を解せざりしが故なり、唯客觀的に僅かに基督の言行を知りたるによる。然れども、彼れ一度ダマスコ<sup>の</sup>門外に於て、天來の悟識的靈火に接し、翻然として悟る所あるや、彼の人物は一變せり。他日彼れガラテヤ人に贈れる書簡の内に書して曰く、

我れ基督と共に十字架に釘けられたり。最早我を生くるに非ず、基督我れにありて生くるなり。然り、彼は基督を自己に於て見出したるなり。此自覺は終に彼を驅つて、世界的大傳道を試みしめぬ。コンコルトの哲人エマルソンの言に曰く

シーザーの手、プレートの腦、主キリストの心、セーキスピアの筆、皆是我有する所の者なり。バイブルに曰く

爾心に基督を誘ひ下らん爲めに、誰か天に上らんと云ふ事勿れ、又基督を死にし者の中より誘ひ返らん爲に、誰か陰府に下らんと云ふこと勿れ、然れば何といへるぞ、道は爾に近く、爾の口にあり、爾の心にありと。

然り、孔子の聖德、釋迦の大慈、基督の神的意識總て此れ吾人の物なり。極言すれば、吾人三寸の胸中實に神あり、天國あり。嗚呼要は吾人の神的生命を自覺するにある哉、吾人自覺して茲に至れば、所謂神人合一の秘密を解し、神智靈覺天真爛漫圓融無礙の妙界に入れる者にして、倫理道德期せ

すして修まる可し。安心立命此にあり、生命元氣此にあり、希望歎喜此にあり此れ豈人生最高の極致にあらずや、

終に臨み、更に少しく、倫理と宗教との關係に述べん。吾人は何も倫理の實行を期せんが爲めの手段として、神を信ぜざる者にあらず、道德の方便として、宗教を奉ずる者に非ず。却て道德的意識の發達によりて、自ら神を認めて之を信するに至るなり。純潔なる愛情の人となりて、自ら信仰を得るに至るなり。宗教の價值は、相對にあらずして、實に絶對なり。聖書に「愛は信仰よりも、希望よりも重し」「心の清き者は幸なり、其人は神を見ることを得なければなり」とある者、又チャニングが「道德進歩して宗教となる」と云へる者、誠に故ありと謂ふ可し。

要するに、倫理は宗教に至るの道路のみ、倫理の終局は實に宗教の起点なり、而して倫理問題の解決は必ずや宗教の力に待たざる可らず。宗教の事豈忽諸に附す可けんや。

(完)

## 支那國民の思想を論ず

咲花 一二三

東海の表、幾重の版圖、幾億の民衆を擁し、自ら稱して中國中華なりとし、一切他邦を蔑視して、戎狄蠻夷なりとなすものは支那帝國にあらずや。

國を建て、星霜茲に四千歳。宏麗繁華一世の文明を誇負せる歐洲諸國が、なほ森澤鬱濕として狐虺其の裡に跳梁し、野遼烟低く沈みて、牧童弦月に笛を弄せし頃、既に業に、此の國には燦然たる文物、燁如たる憲章を有し、明主上に莅みて黔首悉く文明の治に浴するを得たり。然かも現今の狀態